

Title	中世Gildsの文化史上に於ける意義 (三)
Sub Title	
Author	野村, 兼太郎
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1920
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.14, No.6 (1920. 6) ,p.834(96)- 846(108)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	雑録
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19200600-0096

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

with Advantageous Proposals for Improving them
 其の文字を掲げ、目錄を載せ、章を分ち、幾分其の體裁を正しくせり。然れども其の所論中には既に第一編中に論述せられたるものを反復する所極めて多し。洵に反覆重複は彼れが文章の通態にして、其の論述は著しく散漫に流れたり。

彼れは諸經濟的現象の奥底を窮めて其の必然的關係を探るの洞察力を有すること尠少にして、而も彼れが Petty, North, Locke 及び Barbon 等と殆んど時を同じして生存せる人なるを思はゞ、固より前に掲げたる Dove の讚詞は甚しく其の當を失せるものなる可きも、而も彼れが只管天性の機智と實務上の經驗とに指導せられ、當時に於ける幾多の小冊子記者が實務と旅行の經驗なきが爲めに其の論ずる所多く正鵠を逸せるを憾みとし、國家將來の繁榮を以て自己の全勞働

に對して期待する唯一の報酬と倣し銳意其の所信を力説して止まざりしは實に國富増進を以て究竟の目的とせる經濟學發生前に於ける實證的經濟論の面目を遺憾なく發揮せるものと稱するを得可し。(一九二〇年五月)。

中世 Gilds の文化史上に於ける意義 (三)

野村兼太郎

四
 上述せし如き Gilds が文化史上に於ける意義を説明する前に、簡單に一般文化は如何なる傾向に發展するかに就いて述べやうと思ふ。勿論斯の如き發展の傾向を簡單に記述すること云ふのは、かなり困難なことである。多種多様の事象

を一二の原因に歸すると云ふのは、時に誤つて獨斷に陥り入る恐れがある。けれども大體文化の發展を觀察するのに、そこに何等かの歸趣があるやうに考へられる。従つて其の文化目的に到達しやうとする過程に於いても、それに適ふある統一せる傾向が存在して居るやうに思はれる。

すでに他の時期に於いて述べたるが如く、「經濟的史觀論の價值」本誌第十三卷第五號以下連載) 人類の歴史の根底となるものとして、最も有力なるものは經濟的要素である。主として「自己保存」を基本とする物質的方面の生活である。故に吾人が形成する文化の一面は經濟的文化である。換言すれば物質的生産手段の進化である。然し乍ら文化の全體が物質的文化でないことは云ふまでもない。普通物質的方面に相反對する人類の一面として、精神的方面が擧げられる。

即ち藝術、哲學、科學、宗教等の所謂文化の所産の内て抽象的なるものは、吾人の精神的方面の發現であると考へられる。此の人類の精神的方面と物質的方面との對立は、素より嚴重に區別することは出来ない。兩者相待つて、各自の文化を發達させることが出来るのである。然し乍ら吾人の生命を持續するに必要な物質的生活と、それとは全く離れて非物質的に自己の生活を形成しやうとする方面とに大體に於いて區別することが出来るだらう。

現在に於ける人類文化の發展は、其の根源に於ては矢張り未開(Primitive)の時代を經過して來たものと見做さなければならぬ。始めから所謂文明人であつたとは考へられない。此の時代にあつては所謂文化はなかつたと云はれる。其の物質獲得の手段——後世の所謂生産手段なるものは、極めて原始的であつたに相違ない。

即ち單なる自然的産物を彼等が欲する時に、極めて僅かな勞力を費して取得すればいゝのである。此の時代に於ける人類相互に於いて如何なる關係にあつたやうか。勿論互の人格を尊重する等と云ふことはなかつたに相違ない。他人を見ることは、恰も他の動物を見るのと殆ど變らなかつた。又個人自身も自己に對して何等の意義をも認めて居なかつたらう。即ち其の生産手段としては殆ど他人と共同するを必要としなかつた。よし共同的團體を作つて居たとしても、一つの生産過程は一人に終つて居たのである。其の精神的方面に於いては、殆ど自己を意識することがなかつた。他人を見ることは殆ど一般の動物と變らなかつたやう。然し人類はいつまでも此の状態に止まつて居なかつた。物質的方面即ち生産組織の方面に於いても、精神的方面に於いても、此の未開の時代より現在に至る

まで、所謂進化を來たしたのである。進化と云ふ意味を個體の環境に對する應化であるとするとらば、其の個體の環境を形成する物質的方面と精神的方面との發展は如何なる傾向を持つて居るだらうか。何故に文化が發展するやうになつたかの問題はこゝで解決するの必要はない。それが人類の經濟的欲望の増進に原因しやうと、人口の増加した爲めであらうと、又は人類の宗教的神秘的使命あるがためであらうと、かゝることはこゝでは問題としない。何故ならば其の起源が何であらうと、兎に角人類文化の發展は其の史的變遷に於いて事實であるし、且つ亦其の起源の如何が現在文化の價值を少しも増減することはないのであるから、其の文化の變遷を見やうとする此の場合、別に論ずる必要がないからである。

今簡単に生産手段即ち物質的方面の變遷を見

てみよう。經濟史を繙いた者の直ちに氣がつくことは、經濟組織の次第に複雑になつてゆき、従つて各人の共同を必要とするやうになつたことである。自足經濟、氏族經濟、村落經濟、都市經濟、國民經濟と次第に擴大されてゆく。所謂經濟組織の發展は何を意味するのであらうか云ふ迄もなく人類の自己保存を全ふしやうとする生産手段が次第に複雑となり、多數の協力を必要とするやうになつたからであらう。Hart-reeves, Arkwright, Crompton及び Cartwright等の紡績機械の發明は、農家の副業として一家族内の婦女に依つて營まれて居た紡績業を、多數の女工に依つてなされる工場制度に進化させた。其の他種々なる機械の發明は分業の發達と共にこゝに有名なる産業革命(Industrial Revolution)を惹起するに至つた。今日一個人の必要とする物資が、殆ど數ふることの出来ない程の多數の

協力に依ることは、敢て多言を費す必要がない。即ち文化の一面たる經濟的方面にあつては如何なることを理想とするかと云ふに、各人互に協力一致して益々精巧な良好な品質の物資を多量に生産することにあり。然し乍ら斯の如くする反面には、吾人をして一定の規矩に準せしめ益々協力を強制しなければならぬ。多量に同一物を生産する必要上、機械的にならざるを得ない。即ち共同的であり、社會的であることを必要とする。經濟的文化は實に斯の如き方向に發展しつゝあるのである。

次に精神的方面は如何なる方向に進みつゝあるだらうか。此の方面に於ては經濟的文化發展の方向とは全然趣きを異にして居る。即ち人類の自我の覺醒にある。こゝに人類の自覺と云ふのは、云ふ迄もなく一個人の覺醒を意味するのではない。Plato, Aristotleの自我の覺醒は恐

らく現代人のそれに優るとも劣らないだらう。然し當時希臘の一般人と現代人とを比較して見れば、如何に現代人の方が人間として覺醒して居るか、解るだらう。希臘羅馬の貴族時代にあつて、人間としての生活を主張し得たものは僅か少數の貴族に過ぎなかつた。多數の奴隸は全然無自覺でもあり、且つ亦何等自己を主張すべき術もなかつた。是等無自覺な多數の人間が自覺した時に、こゝに新しい社會制度の組織を生ずるに至るのである。現代に於ける資本主義制度に當つて、勞働者が資本家に對して反抗する所以は、多數勞働者の自覺にある。斯の如き自覺の結果が如何なることを生ずるか。過去に於ける人類は其の大多數は共同的であつた。(勿論産業的必要からではない。)自己を意識して居ないから、従つて自己のものと云ふ所有觀念も發達しない。共產的であるを常とする。然るに個

人の意識は私有財産制度の發達となる。而して次第に桎梏から離れて自由になりたいと欲するのは各個人の要求となる。古來革命と稱せらるものは、斯の如き自覺せる多數が少數者の專斷に對する反抗に外ならない。幾ら多數あつてもそれ等が自覺しない限り、革命は起り得ない。無自覺の多數者に對しては、所謂服従の道徳が最大の權威を持つて居る。

斯の如く文化發展の傾向に於いて、一方經濟的方面は其の生産手段の構造が複雑になると共に、吾人の社會的同一一致を必要とし、精神的方面は益々自己を主張せんとする結果、個體的獨立を喜び自我の充實を希望する傾向がある。各階級の自覺は單に數量の増加に止まらずして、各個人の自覺の内容も更に深きを加へるだらう。斯の如く兩者の文化發展の傾向が甚だしく相反するやうになると、こゝに新しい組織を

作り斯して一步々々進化の道程を辿るのである。斯の如き新しき組織は自然と生ずるのではない。吾人が其の自由意思を以つて、斯の如き兩者の傾向を調和するのに最も適當したる社會制度を組織してゆかなければならないのである。以上述べたる如き傾向を以つて發展して來た文化に對してGildsは如何なる役目を演じたか。以下少しく是に就いて論じやう。

五

如何にしてGildsが生じたかと云ふことは、先づGildsの意義を明かにする根據となる。Gilds發生の一つの原因としては都市の發達を擧げなければならぬ。何が故に都市が發達して來たかと云ふことに就いては、一方人口の増加に伴ふ生産手段の複雑化と、他方各人の自己意識に伴ふ自己區別の觀念が發達したことに歸するところが出來やうが、こゝには深く論ずる必要がな

い。Norman Conquest以後英國に約八十の都市が發生した。是等諸都市の間に通商の必要を感じるやうになつた原因は、GrossのやうにEnglandとNormandyとの密接な結合がこゝに外國貿易を増加もさせ、安全にもなし、従つて其の國內の通商も發達させたのであるとのみ解釋することには出來ないと思ふ。勿論外國貿易の發達が國內に於ける産業を刺激して、國內の交易を助長したとは云ひ得るが、其の他に農産物の生産過剰と云ふことが主たる原因でなければならぬ。外國貿易が起らうが起るまいが、各農場に於いて生産餘剰がありさへすれば、こゝに通商の必要を生じて來るのである。外國貿易は單に是を促進する刺激劑となつたに過ぎなす。Ashleyも云ふが如く、農業は市民の主たる業務の一つであつたが、尙ほ市民は其の食物を周圍の田舎から供給されることを必要とした。是が最も原始

的な商業であると云へやう。所が其の町の領主が自身の利益から市場を設置し、通商保護の特許權、入市税等の制度を作成するやうになつた。他方此の通商を益々可能ならしめたのは地方の農業が粗放から周密に進化したこと即ち生産手段の複雑化である。

こゝに於いて上述した特許を得た者が、互に各自の利益保護の爲めに組合を作るやうになるのは當然である。故に最初に生じたのは Gild merchant であつて Craft Gild ではない。Craft Gild が發達するには更に生産手段の複雑化と職人階級の自覺とを必要とする。即ち最初の通商の目的たる貨物は、既に前述した如く重に農産物であつたが、其の後次第に手工業の發達すると共に所謂職人 (artisan) の發生を促し、其の取引貨物も従來と趣きを異にするやうになつた。

Gild merchant と Craft Gild との間に、を受けて發生したものであるか、若しくは積極的に都市領主に反抗して起つたものであるか、是等の各々共に多くの材料を有して居る。然し是は當然なことであつて、自覺せる職人階級が自己の利益を中心として制度の改革を希望し、加ふるに當時都市産業上の實力の保有者として都市政府に對して反抗したのもあつたらうし又都市政府が是等の實力保有者に對して讓與した場合もあつたらう。恰も今日資本家に向つて自覺せる勞働者が反抗することもあるし、又他方資本家が勞働者の自覺を認めて讓歩する者があるやうなものである。故に是等兩種の説明は何れも一部は正當であるが、全部を承認することは出来ない。

以上述べて來た所に依つて Gild は如何なる理由に依つて生じたか、略々明かになつたと思ふ。即ち Gild は一方農業的生産手段の進化と工業的

大陸に於けるやうに激烈な争闘があつたとしても、若しくは又英國に於けるやうに別段著しい争闘がなかつたにしても、何れにしても Gild 自身が大なる勢力を有するやうになり、其の都市政府との關係に於いても Gild merchant に代らんとするやうになつたことは事實である。而して此の間に多少の争闘を免れることは出来なかつた。假令 Gross が云ふ如く Gild merchant と職人との争闘ではなくして、政府と市民との争ひであつたとしても、自覺せる多數の職人を包含して居る市民と其の壓迫者との争闘であることは論ずる筈もない。幸ひ英國に於いては Gild merchant が多數の職人を包含して居たと云ふことが、是等兩者の争闘を少からしめた所以であるに過ぎない。

すでに第二節に於いて述べたやうに、Craft Gild の建設されるに當つて、消極的に都市の依

生産手段の發生とに依る生産的手段の複雑化、換言すれば經濟的文化の發展と、他方商工階級の自覺、即ち従來は單に貴族領主に對して絶對服従の地位にあつた多數の人間が、自己の實力に依る自己の利益を意識すること、即ち人類の精神的文化の發展と、是等兩者の關係を如何に調和すべきやと云ふ問題の解決である。當時の生産手段は未だ職業的分業以上に、技術的分業を必要とする域に發達しては居ない。其の技術は熟練を必要とする。練習修得に依つて始めて製作される。これ Craft Gild に於いて、徒弟、「ジョーナーマン」、親方の諸階段のある理由でもあるし、且つ中世紀に於いて Gild のやうな制度が許容される所以でもある。又彼等の自覺は未だ甚しく大きくない。彼等は一つの階級として其の階級自身の利益を自覺したのである。かの普通 Gild の一職分として見られる相互扶助は、假

令 Kropotkin が讚美したにしても、斯の如きは未だ個人的自覺の淺き時代に於いてのみ可能なのである。故に彼等の相互扶助は其の組合員以外に出づることはない。彼等の共同一致は十八世紀の所謂個人主義的時代の洗禮を受けた後の共同一致とは全然趣きを異にして居る。彼等の共同は各人が其の人格的自我を意識して結合されたのではない。勿論彼等の實力を意識したことが其の權威に對する反抗となつたことは前述した通りであるが、其の反抗するに當つても、未だ自己の人格を完全に意識したのではない。一つの利益共通の團體としての自覺であるから其の團體に對する反抗并びに不利益はすべて無批判に罪惡とされるのである。恰も今日國家が其の存立を危くするものは、絶對的に罪惡とするのと同一である。

斯の如き程度の生産手段と自覺とを以つて、

最も適當とされる社會組織は Gilds 若しくは是に類似の制度である。これ殆どすべての國に於いて、是に類似の制度存在する所以である。故に今日組合組織を稱へるとしても、それは中世の Gilds 組織ではない。道具 (Tool) の時代を経過して機械と云ふ生産手段の發生した時期に於いて、更に個人的意識の強き各人の共同一致を豫期し得るやうなものでなければならぬ。

以上の記述に依つて Gilds の文化史上に於ける第一の意義は略々明かであると思ふ。前述せる福田博士の言の如く「血族團體」とか「地域團體」とか云ふ語を以つて、Gilds の意義を説明しやうとするのは、甚だ明確を欠くやうに思はれる。純粹の血族團體の殆ど存しないが如く、純粹の地域團體も存して居ないだらう。普通兩者相待つて一團體を形成する。現在の國家は地域團體とも云へるだらうが、血族團體であることもあ

り得るだらう。殊に所謂民族自決と云ふやうなことは何を意味するのであらう。福田博士は我邦の俚俗に「遠くの親類、近くの他人」と云ふことありと云はれて居るが、又一方には「血は水よりも濃し」と云ふ諺もある。唯人類の生物的本能的感情よりも理性的傾向が次第に發達するに従つて、單なる血族的感情よりも理解に依る結合が多く生ずると云ふ點に於いてのみ、一部の眞理がないことはない。故に Gilds は血族團體の精神を紹ぎ、地域團體の前驅たるべき過渡的の制度に過ぎないものではなくして、一方經濟的文化と他方精神的文化とから生ずる社會的欠陥を救ふ唯一の途であつたのである。

更に上述の積極的意義に對して、Gilds の消極的の意義がある。Ashley が「樹木は其の果實に依つて解るが、Gild 組織は其の果實に依つて判斷される。」と云つて居る如く、Gilds は其の生

じた結果に依つて、更に一つの意義を有するのである。それは即ち商工業者からなる多數の中階級 (middle class) の發達である。殊に十四世紀の末期より十五世紀の初期にかけて、到る處の都市に、種々なる職業の Gilds 發生して、組合員の數も益々増加するに當つて、すでに述べたるが如く各自が獨占の利益を得んとして親方の人員に制限を附した結果、こゝに多數の Journeymen を生ずるに至つた。是等の Journeymen と親方とは如何なる關係にあつたのだらうか。此の問題はかなり解決に困難である。一方保守的な論者は中世 Gilds の制度には雇主と被雇人との間に何等利害相反するやうなものは少しもなく、極めて調和された恰も幸福な家族のやうなものであると云ひ、他方革命的な社會主義者はすでに中世紀に於いて勞働者は資本の壓迫を蒙つて居るものとして、そこに兩者の大な

る確執があつたのであると論じて居る。勿論是等兩者共に正常な説であると云へない。すでにアンシュレーの指摘して居るやうに、一つの場所に起つた事實を以つて、他のすべての場所の事實と推斷したり、すべての世紀を混同して論究したりする結果、かゝる結論を生ずるのである。十三世紀と十四世紀、十四世紀と十五世紀、其の起つた事實を別々に観察しなければならぬ。歴史は進化の過程である。不斷の流れである。一の事實を以つてすべての時、すべての場所に適用するのは危険である。Gilds 組織の最初に於いては略々社會文化の調節機關として、前述の役目を全ふして居たであらうが、約十五世紀以後に於いては、多くの Journeymen が Journeymen 許りの組合(association)を作つたこと云ふ事實から推斷しても、すでに親方と彼等との間に利害相反する事實があつたと見做し得

る。是等の多數者の自覺がこゝに十八世紀に於ける自由の要求となつたのである。それが更に分業の發達、機械の發明を伴つて、こゝに近世産業組織に解決の途を發見したのである。即ちGildsの消極的意義はGilds自身を破壊するやうに、人類文化を促進せしめた點にある。以上の論述の結果からして、次ぎの如き誤解が生じ得ると思ふ。即ち人類文化の進歩はある困難が発生した場合、それに打ち勝たんとする努力に依つて、特種の能力の進化が生ずるのである。恰も土龍が絶えず土地を掘る必要からして、四肢に特種の變化を來たし、それに適した能力を有するやうになるが如きである。勿論人間も動物である以上、かう云ふ種類の應化(Adaptation)が行はれるのは事實である。所謂人間が著しく境遇に依つて支配される事實は、

明かに是を示すものである。然し人類の進化は單なる自然に對する應化ではない。中世紀に於いて組合組織を打破して個人主義的自由を欲求したのも、更に現代に於いて資本主義生産組織を打破しやうとするのも、前述の如き應化でないことは明白である。若し前述の如き境遇にのみ應化せんと求むるのであつたとすれば、恰も弱者たる兎が鋭敏なる聽覺と輕快なる逃走力を以つて、狼からの危害を逃れんと欲するが如く、勞働者は如何にすれば資本家の眼を暗まし安逸なるを得るか云ふことのみを考ふべき筈である。兎が狼に向つて反抗したり權利を主張したりするのが無謀であり、滑稽である如く、勞働者が資本家に對して反抗したり、權利を主張したりするのは無謀であり、滑稽であることにならなければならぬ。果してさうであらうか。資本家が横暴であらうと専制であらうと、

不當なことではなくなる。斯の如き唯物的の考へ方が誤つて居ることは、是等の事實から次第に推論して行つても、直ちに氣の付くことである。然しすでに是等のことに就いては、他の場所(拙稿「經濟的史觀論の價值」)に於いて論じたこともあるから、こゝでは唯誤解されることを恐れて、一言附加するに止めて置く。以上述べたる所に依つてGildsが經濟史上省略することの出来ない所以は明かになつたと思ふ。尙ほGildsに關しては論すべき點が甚だ多い。Gildsの字義起源Gildsと宗教との關係、更にGildsと他の國々に於けるGilds類似の組織、例へば我國の「座」、大陸に於けるZunft等との比較研究等、種々なる興味多い問題が少なくないが、こゝには單に中世Gildsの文化史上に於ける意義を論述するに止めて、それ等の問題はすべて他日に譲る。

本論文を起草するに當つて、瀧本誠一博士及び加田忠臣君より、其の貴重なる蔵書を貸與して下さつたことに就いて厚く感謝の意を表す。

に於いて Hailors (1570) 等である。Ashley:— op. cit. vol. I, part II, pp. 123-4) (一九二〇年五月十七日稿了)

- (註一) Ashley:— op. cit. vol. I, part I, p. 68.
- (註二) Gross:— op. cit. vol. I, p. 2.
- (註三) Ashley:— op. cit. vol. I, part I, p. 69.
- (註四) ibid. pp. 78-80.
- Gross:— op. cit. vol. I, pp. 106.
- (註五) ibid. p. 110.
- (註六) Kropotkin:— "Mutual Aid" (popular edition) pp. 142.

- (註七) 福田博士「續經濟學研究」一〇八頁
- (註八) Ashley:— op. cit. vol. I, part II, p. 168.
- (註九) ibid. pp. 98-9.
- (註一〇) Journeymen の組合が出来たのは London に於て 50 H' saddlers (1383-1396), cordwainers (1387), tailors (1413-1696), blacksmiths (1435), carpenters (1468), drapers (1493-1522), ironmongers (1497-1590), founders (1508-1579), fishmongers (1512), clothworkers 及び armourers (1589) Conventry に於ては weavers (1424-1450) Exeter に於ては tailors (1512 以前) Oxford に於ては shoemakers (1512) Bristol

勞働者保險の施設を論ず (三、完)

園 乾 治

最後に勞働者保險の重要な部門として寡婦孤兒保險と失業保險の二者が猶ほ論述せられなすで残つて居る。抑々勞働者の死亡に因つて其の遺族は如何なる經濟的打撃を蒙るか。先づ遺體埋葬の爲めに費用の支出を必要とせらるゝことは其の一である。而して若し死亡せる勞働者の所得に因つて一家が扶養せられて居た場合には單に斯かる一時的の經費のみに止らず更らに大なる經濟的打撃を受けねばらぬ。乃ち遺族は

明日の日より生活の保障を失はなくてはならぬのである。一家の柱石を失へる悲嘆を蔽ひて彼等は直ちに生活の脅威と闘はねばならぬ。宏大なる仁慈の心なき者は此場合に於ても拱手傍觀を續けるかも知れぬ。夫れは尙ほ恕すべしとしてももつと悪い場合を想像する時は何人も戦慄するであらう。扶養の途を失へる寡婦が適當なる収入方法を講ずることが出来ない場合はどうなるか。或ひは父兄を喪つて中途にして廢學の止むなきに立到つた場合はどうなるか。斯かる場合にその遺族に對して何等かの救濟の途を講じないで放任するとすれば其の結果は如何であらう。單にそれは一家一族の悲惨不倖として看過することを許さぬものである。實に大なる社會上の由々しい問題となるであらう。何となれば何人も容易に想像し得るやうに彼等寡婦孤兒は當然の成行として社會の暗黒裡に墮落しあら

ゆる罪惡を犯すべき危険に曝さるゝからである而してかゝる不倖を救濟せんとする目的を有する社會上の施設として茲に寡婦孤兒保險なるものがある。

此の種の保險の最も發達したる國としては先づ合衆國に指を屈しなくてはならぬ。而して之れに次いで英、獨兩國の施設に見るべきものがある。而して之れ等の國に於て私營保險會社の經營に係かる場合には「インダストリアル」又は「ブルーデンシアル」の名を冠して呼ばるゝものであるが普通行はるゝ生命保險と相異するところ換言すれば此の種の保險の特徴とも云ふべきものは大體次ぎの三つである。先づ第一に勞働者の死亡率大にして生存年齢の短かきこと。第二に保險金額の小額にして經營費の多額を要すること。第三に保険料は年拂又は半年拂にあらずして多くは週拂なるを以て取立煩雜